

A close-up photograph of a ladybug with a bright orange-red body and several black spots, perched on a cluster of small, white, star-shaped flowers. The background is a soft, out-of-focus green, suggesting foliage. The text is overlaid on the image in a clean, white, sans-serif font.

僕の詩を君に捧ぐ

macoto

僕の詩を君に捧ぐ

macoto

目次

- 01. 君にとって ★試し読みできます★
- 02. 知らない君に
- 03. そういひと
- 04. 臆病な君だから
- 05. キミのイトコ
- 06. 天地がひっくりかえる
- 07. ひなたぼっこ
- 08. 忙しく飛び回っている君へ
- 09. 心呼吸 ★試し読みできます★
- 10. オレ

- 11. 温かい手
- 12. 君待つ場所
- 13. カラフル ★試し読みできます★
- 14. 偽りの僕
- 15. 膨らんだイメージ
- 16. 一生懸命
- 17. OVE ★試し読みできます★
- 18. 君がつくったもの
- 19. 翼を広げて
- 20. 止まり花

- 21. 空を飛べるなら
- 22. 君を乗せて
- 23. answer ★試し読みできます★
- 24. キラキラ
- 25. 不器用な笑顔
- 26. 口移し
- 27. 余韻
- 28. 怖いんだ
- 29. 叶わぬ約束
- 30. カラスアゲハ

- 3 1. たいして変わらない
- 3 2. 世界一
- 3 3. つよがり
- 3 4. 避難場所
- 3 5. 変わり続ける世界
- 3 6. 手離れた手
- 3 7. 思い通りに
- 3 8. さよなら
- 3 9. 棘
- 4 0. 馬鹿

- 4 1. ほんとはね
- 4 2. 孤独のなかの愛
- 4 3. 君のメロディ
- 4 4. サンディ
- 4 5. キミじゃなきゃ
- 4 6. 君の視線
- 4 7. 震える肩
- 4 8. 口下手
- 4 9. 暗号メモ
- 5 0. 手をつなごう

- 5 1. ひとつになれる場所

君にとって

たとえば

君にとって 僕の言葉が

この先にどんな影響が

あるのかは分からない

なにも変わらないかも知れないし

大きなきっかけになるのかも知れない

でもね

いつか君と離れる時が来て

君が悩んだり迷ったりしたら

思い出して欲しい

その時のために

僕は言葉を伝え続けよう

君にとって良い方向へ

向かうようにね

知らない君に

僕のまだ知らない君に会えるかな？

こんなにも心は近くにあるけれど

まだ僕の知らない君がいるんだ

君の知らない僕を見せられるかな？

まだ君に伝えきれてないことがあるから

さらけだす僕の心を君だけに見てほしいよ

なにを思われようとそれが僕なんだから

感じてくれるかな...

僕を知らない君へのメッセージ

そういうひと

まだ正直言って君のこと

よく解からないことばかりなんだけど

きっと君はそういうひとだと思ってた

たぶん僕も逆の立場なら

同じようにしていたと思うから

やっぱり似ているのかもしれないね

誰よりもひとの痛みを

他人事じゃなく感じられる君だから

ただ何も言わずに寄り添っていてくれる

君はそういうひと

臆病な君だから

君と僕とは似たもの同士

たぶん古傷が疼いて臆病になってるんだね

君はズルイから僕の気持ちを知っても

自分からは動こうとはしないんだ

『もう誰かを愛することはできない』と言う僕に

君は言ったね

『一度でも人を深く愛したことがある人は

また人を愛することができるんだよ』って

君の言葉が嘘でもいいんだって

騙されたっていいやって心から思えたのは

君も僕も似てると感じたから

君を愛さずにいられないのは

僕と似た痛みを心で感じたから

.....でもさ

こんなとこまで似なくていいと思うんだよなあ...

キミのイトコ

ボクのいつもの悪いクセ

ほらまた

キミを怒らせたんだ

わかってるんだ

キミは素直に言えず

いつもの憎まれぐち

でも

ついつい言い返しちゃって

またケンカになった

キミのいつもの悪いクセ

ほらまた

ボクはその天邪鬼に

振り回されてるんだ

キミの性格を先回りして

ボクが逆のこと言ったとき

つい笑ってしまったから

またまたケンカになった

こんなチグハグな関係でも

キミから離れられないのは

わかっているんだ

たくさんあるキミのイイトコ

どんなに大きなケンカをしても

次の日には

何事もなかったかのように

キミは笑ってくれるんだ

ひとつだけ教えておくよ

それがキミのイイトコ

たくさんあるキミのイイトコ

全部言いたいから

ひとつだけキミのイイトコ

天地がひっくりかえる



天地をひっくり返してみると

今まで見てた景色も

違って見えるでしょ？

そう言って両足を広げた

股の下の三角形から

君は笑った

『ほらやってみて』

そう言って僕の背中を

押す君の手のぬくもり

天と地がひっくり返った世界でも

君は楽しそうに笑ってる

君はいつも教えてくれる

どんな世界に居ても

笑顔でいることが

すべての景色を変えてくれると



『キミの言う通りだったよ』

意固地になってたボクは

危険から身を守ることばかりで

こんなに気持ちいいことを

やらなかったなんてね

ちょっとぐらいのスリルと冒険

たまにはしてみるのもいいもんだね

忙しく飛び回っている君へ

忙しく飛び回っている君へ
余計なお世話かも知れないけど
たまには休んだ方がいいよ
君はいつもあちこち飛び回って
落ち着く場所がないように見えるんだ

もし僕が手を差し伸べたら
君はこの手を掴んでくれるかな
僕は君の心の止まり木になれるかな
できることならずっと止まっていて欲しいけど
また君は大空へと飛び立つんだろうな

それでもいいよ
疲れたらまた僕の所へおいで
忙しく飛び回っている君へ



心呼吸

きみの心が呼んでいるような気がした
だからぼくはいま ここにいるんだ

たとえきみが呼んでいなかったとしても
ぼくの心はいつでもとなりにいて
きみの心を見守っているよ

そうだなあ...

それは呼吸をするのと似たような感覚
きっと もう ぼくの心のなかで
きみは空気のように必要な存在

心は何処に行きたいかを
口に出さなくても教えてくれる

だからぼくはここにいる

またきみに会えるかなんて
神様にしか分からないけど
明日か 明後日か 1年先か
もしも二度と会えないとしても

ぼくにできること

しんこきゅう
心呼吸 して

また会えると信じ続けること

一期一会という想いを胸に
いま目の前にいるきみに微笑むこと

人生はほろ苦いコーヒーみたいだ
上質になればなるほど
その苦味は増してゆくんだ

そりゃあ
ぼくだって早く大人になりたいよ
でもブラックは苦手なんだ

やっぱりぼくはミルクが欲しいよ
暗闇のようなこの人生には
きみというミルクが必要なんだ
ハートを描いて注いでおくれよ

たっぷりミルクが入った
ほのかに甘いカフェ・オ・レ
ぼくと混ぜり合わさって
この人生を甘くしておくれ



温かい手

氷のように冷たくなってしまったこの心に

君はそっと手を差し出してくれたね

君の手は温か過ぎてその手を掴んだら

僕の手が溶けてしまいそうではじめは拒んだけど

凍えた僕は必死で助けを求めようとしても

目の前には ^{あさもや}朝靄 寒くて唇が震え声も出ない

そんな僕に もいちど差し出された君の手

その温かい手が僕の心に触れると

氷が溶け出すかのように涙となって溢れ出た

頑なに閉ざしているだけでは

氷の世界からは抜け出せない

溶けるのは無くなるんじゃなく ^{ふく}膨らむこと

君との夢が膨らんでゆく

そんなことを教えてくれた

温かい手

君待つ場所



いつも同じ時間の電車に乗って
僕の使ってる最寄り駅のホームで待ち合わせ

君が途中下車して来るのを
お決まりのベンチに腰掛けて待っている

なにもないただのベンチだけど
僕にとっては特等席なんだよ

毎朝 君を待っている時間を過ごす
特別な場所

...プシュー

扉が開くと君が押し出されるように降りてきて
しばらくこのベンチで話しをしている

慌しい周りの空気も気にせず
僕らはこの特等席で次の電車を待つ

ただそれだけで なんでもないようなただのベンチが
僕らの特等席に早変わり

君待つ場所

ぼくは きみと居ると 優しい気持ちになれるんだよ

灰色の世界が きみという絵の具で
カラフルに彩られてゆくのをしているぼくは
気がつくとき微笑みながらその風景を
心のキャンバスに描いているんだよ

いつでも どんなときでも 離れていても
この心にきみを思い浮かべれば
味気ない日常ですら素敵に思えて
ぼくは優しい気持ちで居られる気がするよ

きみが ぼくと同じように想ってくれるから
ふたりの想いがぼくたちを包み込んで
優しさがつながって魂が喜んでいるんだよ

きみのまなざしが ぼくを優しくさせる

灰色の世界は きみ色に染まってゆくよ



偽りの僕

君があまりにも美しすぎるから
僕は僕の汚いこの心を隠してしまいたくなるよ
こんな僕を知ったら君は僕のことを嫌いになるかな

君の美しさが見た目だけじゃなくて
内側から溢れてるものだって感じるだけに
僕のツクリモノの顔は引きつって見えてるんだろうな

だけど君は教えてくれたんだ
新しい僕に生まれ変わろうとしてるから
今の僕が汚いって感じてるんだって
僕の頭の中に理想とする僕がいるからなんだよってね

君は言ってくれたんだ
『作った君も君が作った本当の自分でしょ？』

そして
『今の君が汚れててもそのままじゃないでしょ？』

人は成長する度に何度でも変わってゆけるから
たとえ偽りの僕でも受け入れてみようと思うんだ

今は汚れた自分だとしても
今は本当の自分を見せられなくっても
いつか君のように自然体で生きられる
美しい人になれるようになってね

膨らんだイメージ

どンドン^{ふく}膨らんでいったイメージを
少し持て余してるんだよ

想いは変わらず いや どンドン膨らんでくけど
形にする^{すべ}術がないから
こうして筆をおろして 書きなぐってはみたものの
やっぱりあの人みたいには書けないんだ

.....でもさ
あの人には書けないものを書いているときもあるんだって
君に言われて気が付いたとき
世界は変わったんだ

そうか誰かの真似をしなくてもいいんだな
そうして書いたことはこの心身^{からだ}の一部なんだよ

嘘ではないけど すべてでもない
僕はただのひとりのにんげんだもの

.....だからさ
そんなにイメージを膨らませないでおくれよ
僕はどこにでもいるにんげんだもの

その膨らんだイメージを^{しば}萎ませたときに
残った信念だけが頼りなんだ

一生懸命

命を懸けて一つのことには生きている君

だれかは一生懸命なんてかっこ悪い

そんな必死になって馬鹿みたいって言うけれど

僕はそうは思わないよ

たとえ世界中の人が君を笑ったとしたって

僕だけはずっと君の味方だよ

君のことを馬鹿だと言って

自分の人生を一生懸命になれない方が

僕はよっぽどかっこ悪いと思うんだ

僕は一生懸命な君を守りたい

一生 この命を懸けても

OVE

僕の想いはこの夕焼け空のなか

まるで雲に隠れる太陽のように

この写真のなかに隠してるよ



O V E

見つけてくれるかな

太陽のように熱く柔らかい僕の想いを

この胸に秘めてるメッセージ

君がつくったもの

それは君の心がつくったもの
だって僕はまだ何も触れてないもの

君が感じている不安も
君が感じている幸せも
君が感じている恐怖も
君が感じている世界も

それは君の心でつくったものだもの
一人でつくったものだもの

僕の体に 僕の心に 僕の魂に
触れてみて感じてごらんよ

寂しさも 悲しみも 距離も 疑問も
不思議なくらいに消えてなくなるはず

僕の心がつくったもの
壊したって構やしないよ

本当の君に辿り着けるのなら...
二人でつくってゆけるのなら...

翼を広げて

もう充分がんばったよ

もうこれ以上 苦しむこともないよ

キミのがんばりは伝わったから

疲れた翼を休めていいんだよ

ボクはいつでもキミが休めるように

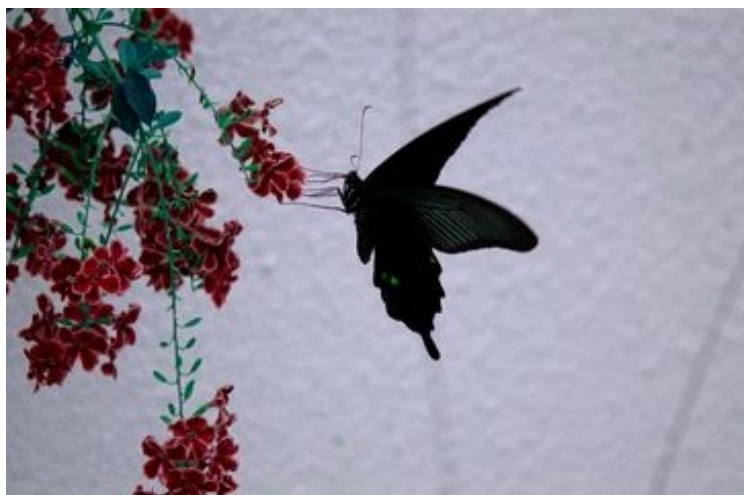
ここで待っているから

そしてまたいつでも

翼を広げて 大空を飛びまわるといいよ



止まり花



僕からは動けないから
君を誘いだす香りを漂わせた

その香りに誘われて
僕の蜜を吸う君は
嬉しそうに微笑んだ

僕の蜜が尽きるまでは
少なくとも君はここに居る

君は汚れてなんかいないよ
純粋な黒は純粋な白と変わらない

世間は君にいろんな色をつけようとするけど
君は君自身を守るために戦っている

そんなときはいつでもおいでよ

君が疲れたときに休むことができる
止まり木のような存在になりたいよ

空を飛べるなら



もしも僕が空を飛べるなら
遠くに住んでる君の元へ
今すぐに飛んで行きたいよ

遠く遠くこの青空を飛んで
あの海を越えて君の元へ

たぶん辿り着く頃には
きつとこの空は暗くなってる

二人きりで誰も居ない場所
素敵な夜空の見えるあの浜辺へ
飛んで行こうよ

朝が来るまで寄り添っていよう
二人寄り添って...

君に逢いに行きたいよ

君を乗せて



世界で一番最初に空を飛んだ人は

きっと高く舞い上がった空の上で

こんなことを思ったに違いない

「なんて素敵な世界なんだろう！

愛しい人よ 君を乗せて

この美しい景色を一緒に見たいよ」

なにか素晴らしいものを見たときに

僕は真っ先に君に見せたいと思うんだ

愛しい人よ 君を乗せて...

誰かが決めた答えなんて

僕は信じたりしないんだ

この心が「うん」って頷いたとき

それが僕だけの答えになるって知ってるから

君の心に答えを求めたって

返ってきた答えが正解とは限らない

だって君はすべてを見せてくれやしないんだ

そう 僕と同じでね

だから君に答えなんか求めたりせずに

君に僕の答えを与えるだけでいいんだ

そこに君の笑顔があれば

僕の答えはきっと正解なんだから

キラキラ



水面がキラキラして見えるのは

君が隣りに居てくれるからだよ

きっと僕ひとりじゃ

こんな綺麗な景色は

見られなかったんだ

君と僕だけしか知らない場所で

のんびりと過ごす時間と

君の笑顔が輝いているから

僕の目に映るものすべてが

キラキラ

不器用な笑顔

うまく言葉が出てこなくて
お互い何故か笑ってしまうね

君がおどけてみせるのは
なにか伝えたいことがあるんでしょ？

そうって言葉にしてみたくても
僕も笑っているだけしかできない

お互い不器用だから
相手の気持ちはなんとなく分かるのに
うまく言葉にできないんだ

せめて不器用な笑顔で
少しでも伝えたくてまた笑った

君の視線を感じているけど
下手に気取ることもできないから笑った

あまりにも言葉にできないから
君は泣いた

いつも前向きでまっすぐな心の君が
泣いてるからうまく慰められなくて僕も泣いた

ふたりお互いのぐちゃぐちゃな顔を見て
思わず不器用に笑い合った

どうしても想いが伝えたくてやっと出た言葉

「君のことが好きだよ」

口移し

唇が触れただけで

こんなにも幸せな気持ちが溢れてくる

心の底から湧き出てくる気持ち

そっと口移しするように

心と心を繋げるようにキスをした

ひとつになれるのは

君の唇だけなんだ

この愛情を捧げるために

心を注ぎ込むようなキス

余韻

君とのデートの終わりが
近付いてきてるね

今日一日はあっと言う間だったよ

楽しい時間が過ぎるのは早いね

帰りの駅
ホームまで見送り
君とドアの前で出発のベルを待つ

楽しかったデートの余韻が残るふたり
ちょっと照れながらお別れのキス
今日一日の余韻を残したまま

プルルルルルルル...
電車のドアが閉まる

僕はまたこの余韻を胸に
ひとり日常に戻っていくよ

また君と逢える日まで...

怖いんだ

僕はこれ以上
君を好きになるのが
怖いんだ

いつも僕はノーガードで
この心を捧げてしまうから
いつか君の必殺サヨナラパンチが
飛んできてよけれやしらないんだ

一流のボクサーは
自分の弱さを知っているから
ガードも固い

でも僕は三流ボクサー
かけひきなんてできないし
全力で君に向かうしかない

僕は前の試合で
相手のパンチをくらって
心がズタボロになった

もうこれ以上のパンチをくらうと
パンチドランカーになるらしい

だから僕はこれ以上
君を好きになるのが
怖いんだ

だけど僕はそれ以上に
君を失うのが怖いんだ

そしてこの恐怖から逃げてしまうことが
僕が僕でなくなってしまうようで
一番怖いんだ

叶わぬ約束

『いつか君に会いに行くよ』
心の中で約束をしたけど
僕が生きている限り

叶わぬ約束

砂時計

届かない愛

わかっているけど
心の中で約束をするよ
『いつか君を探しに逝くよ』





哀しみはいつの間にか

影を引き伸ばして

僕よりも大きくなっていた

黒い服を纏って

歩くこの姿に

重く押し掛かる影は

僕の過去だろうか

あの光が遠くから

僕を照らして

影は伸びてゆく

お願いだから

もう少し近くに来て

そばに居てくれないかな

君という光が

近くで僕を照らして

影を薄くしてくれる

哀しみを包む

柔らかな陽射し

君の微笑み

たいして変わらない

僕が居なくなっても

明日は変わらずにやってくる

たとえ僕が居なくなっても

世界はたいして変わらないだろう

君が居なくなったら

僕には明日はやって来ない

もしも君が居なくなったら

僕の世界は無と変わらない

少しだけでもいいから

君の心に触れたくて

この手を伸ばしてみたけど

この気持ちを差し出したけれど

僕らはたいして変わらなかった

僕が居なくなったら

君の明日はやって来るかい？

もしも僕が居なくなったら

君の世界は何かが変わるかい？

たいして変わらないのならば

君を失うことも 君と別れることも

君を愛することも 君に愛されることも

何が起きてもたいして変わらないよ

僕が君と一緒に居たい気持ちも

僕が君を必要としていることも

僕が君を心から愛していることも

この先 何十年経っても変わらない

これだけは願うよ

僕らの気持ちがたいして変わらないことを

世界一

そんな簡単に世界で一番なんて言わないでよ

世界はそんなに狭くないんだから

なんて怒る皮肉屋な君のこと嫌いじゃないよ

たしかに僕の世界なんてちっぽけなものだし

この世界のすべてを見たわけでもない

もちろん君以上のひとがまだ居るのかもしれない

けど

この世界は常に流れて変化するけれど

いまの時点では君が世界一なんだよ

そして

僕のちっぽけな世界が この先どんなに大きくなっても

どんなひとが現れようとも これだけは確信してるんだ

僕の世界のなかにいる君が

僕の心のなかにいる君が

世界で唯一 愛しいひとなんだよ

つよがり

君がつよがりなのは

人一倍 相手の気持ちを考えて

心配させまいと やせ我慢してるって

僕は知っているんだよ

でも僕はあえてそれを知らないふりをする

もしもつよがりな君が涙するときには

僕がぎゅっと抱きしめてあげる

他の誰にもその涙を見せないように

僕の胸が君の涙で濡れてしまっても

僕は気付かないふりして

君を強く抱きしめてあげるよ

避難場所



君がもし疲れてしまったとき

君にもし危険が迫っているとき

君がもし助けを必要としているとき

とっさに入って逃げられる場所を探しておこう

もしも疲れてしまってどうしようもないとき

僕が君の避難場所になればいいのに

もしも危険に晒されているとき

君の盾となり守ることができたならいいのに

もしも君に助けが必要なときには

僕のことを必要としてくれれば嬉しい

いつでも君の避難場所でありたいと思うよ

変わり続ける世界

君と出逢ったとき 僕の世界は変わった
君の事を知ったとき 僕の事も分かった
君が話したとき 僕の顔が変わった
君と遊んだとき 僕の唇が笑った
君にキスしたとき 僕の想いを注いだ
君が泣いたとき 僕の瞳も潤んだ
君と繋がったとき 僕の心は震えた
君を愛したとき 僕の魂は微笑んだ

君に出逢った時点で二人の世界は変わった
少なくとも言葉を交わした時点で
僕らの世界は変わっていったんだよ

君が変わったのは僕だけのせいでもない
君が変わったのは僕だけのおかげでもない
だけど
僕が変わったのは君との出逢いのせい
そして
僕が変わったのは君との絆のおかげ

それは変わる世界
良くも悪くも 悪くも良くも
この世はすべて変わり続ける世界

手離れた手

やっとの思いで繋いだ手

もう絶対に手離さないと決めたのに

僕は君の手を離してしまった

僕から離れたのか

君から離れたのか

判らないくらいぎりぎりまで

握り締めていたっけ

固く繋いでいた手を離れた余韻が

いまも手のひらに残っていて

いつまでも いつまでも

後悔を刻んでいるこの手離れた手

思い通りに

たとえ君が僕の思い通りにならなくても
僕は君の事を思い続けているよ

たとえ君が他の誰かと結ばれたとしても
僕のこの気持ちはずっと変わらない

そんな大きな人間になりたいんだ
今の僕とはかけ離れているけれど...

君を支配することに喜びなんかなくて
ただ君の隣にいれることだけが
僕の望みだったはずなのに
いつのまにか君を縛りつけていたみたいだ

そんなちっぽけな僕だけど
変わらずに君の幸せを願っているよ

たとえいつか見た君の笑顔が
他の誰かに向けられたものだとしても

僕は僕の道を歩きながら
風に吹かれて口笛を吹いて

すれ違ってしまった君へと
届くことのない想いを風に乗せて

さよなら

もう君が僕を必要としてないこと
もう僕が君のためにできること
もう きっと 僕の役目は終わったんだ

それは悲しいことでもないし
手を上げて喜べることでもない
とても複雑な気持ちだけど...

さよなら
ここに一緒に居た
お互いが必要だった時間

さよなら
僕の支えが
必要なくなった君

出逢い と 別れ
それは誰かの意思のみでは訪れない
不自然に見えても自然な流れ

さよなら

さよなら

お互いのために

棘

棘が刺さって抜けないよ

君の言葉という棘は

いつまでも僕の心に刺さったまま

痛みを植えていった

きつとこの棘を抜いてしまえば

心の傷も 痛みも少しずつ薄れてゆくだろう

だけど僕は自分ではその棘を抜けなかった

僕の心に住んでいる君との思い出が

その棘を抜いた穴から

溢れ出してしまおう気がしたから

君が残していった言葉という名の

棘が刺さって抜けないよ

ぼくは自分の哀しみばかりしか

考えられずに

きみの寂しさに

気付いてあげられない馬鹿だ

哀しみや苦しみを理由にして

独りよがりなぼくなんか

忘れてしまってもいいよ

情けないぼくは

いつまでもウジウジして

きみの寂しさを

埋めてあげる日が

いつ来るかも分からないから

もうぼくのことなんか忘れて

新しい恋を探した方が

いいんじゃないかなあ...

嘘だよ

ほんとは忘れて欲しくないし

きみのことは忘れられないんだ

でも

きみになんて言えばいいのか

どんな顔して会えばいいのか

いまとなっては

わからないんだ

ごめんね

逢いたいよ

ほんとはね

ほんとはね

僕はそんなに強くないんだ

ただ君に心配させたくないだけ...

だから僕は平気なフリして

上を向いて我慢をしたんだ

ほんとは泣きたかったけど...

ほんとはね

君に会えなくて寂しかったんだ

いつでも僕の心は君でいっぱいだから

もしも君に会えたなら

僕はきっと泣いてしまうだろうな

ずっと我慢してたぶん少しだけ

その胸で泣かせてくれないかな

ほんとはね

いつも笑ってたんだけど...

孤独のなかの愛

雑踏のなかで

たくさんの人に囲まれているのに
僕は孤独を感じることもある

人はいろんな人に

周りを囲まれて生きているけれど
ときには疎ましく思うこともあるよね

逆に真夜中

虫の音も聞こえないような静かな部屋で
孤独のなかに光を見つけることがある

人は孤独になってから

誰かのぬくもりを思い出し
寒さに耐え抜くこともある

もしも大勢のなかで生きるか

孤独のなかで生きるかの
二者択一しかできないのならば
僕は孤独を愛そう

孤独のなかにこそ他者の愛を感じて

君が居てくれたことのありがたみを知るだろう

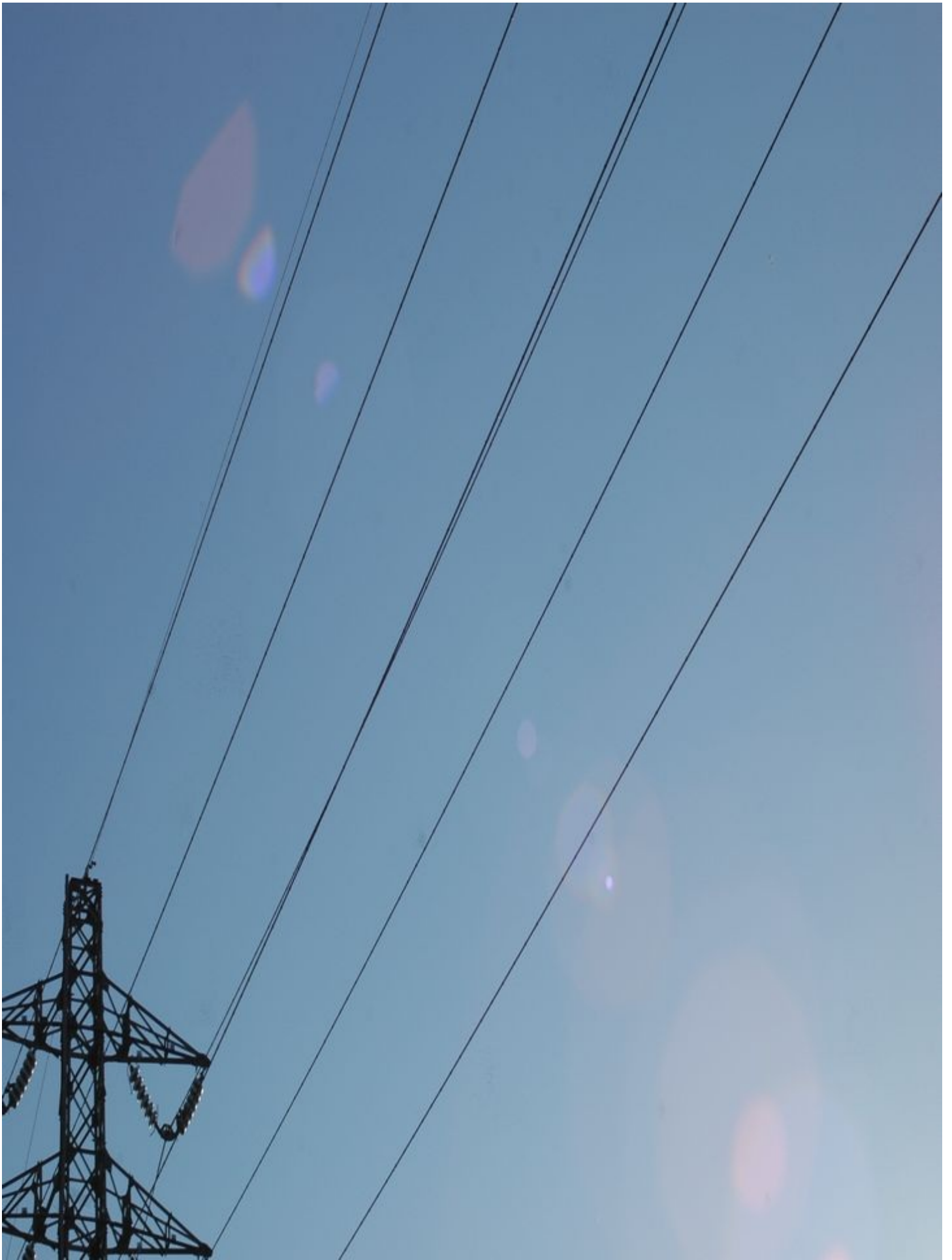
そして君が恋しくなって君の幻を見るだろう

だから孤独のなかでも僕は独りじゃないんだ

たとえ君と離れることになったとしても

僕は孤独を愛するだろう

離れ離れになってしまった君を愛するように...



君のことを想うたびに浮かぶメロディ

忘れてしまわないように

この空いっぱいの五線譜に描くよ

君と離れているときだって

僕はこの空を眺めて君を想ってる

君は僕のことなんか忘れちゃった？

メロディは僕らの周りにたくさん流れてる

目に見えない 耳に聴こえない

言葉にできない

そんなときには無理しないでいいんだよ

ただ そこに

心のなかにあるメロディを感じていよう

いつかそのメロディに想いが乗る日が来るから

サンディ

最初はね

なんか苦手なタイプだったんだけどさ

君にはいつの間にか心を開いてた

一緒に居ると自然体な僕で居られて

君の言葉にいつも励ましてもらっていたから

なんだか居なくなると寂しいんだよ

どんなにつらくても隣りに居てくれて

弱気になった僕を叱ってくれたり

「がんばれ」って背中を押してくれたりね

そんな君が最後に見せてくれた優しさ

僕は君と過ごせて本当に良かったと思う

僕をちゃんと見ててくれてありがとう

キミじゃなきゃ

誰でもいい訳じゃないんだ

どんなに似ていても

キミじゃなきゃダメなんだ

キミの声を聞くだけで

しあわせを感じる心は

まるでパブロフの犬のよう

キミがそばに居ないだけで

とても不安になってしまう心は

まるでライナスの毛布のよう

かけがえのないものだから

代わりなんていないんだ

キミじゃなきゃダメなんだ

君の視線

いつもどこかで君が見ていてくれる

そんな風に思っているから

僕は君に恥じないように生きているよ

たとえ君が見てくれていなくてもね

僕は僕のままで生きて行かなきゃならない

それが君との約束だから

心でいつも君の視線を感じているから

僕は頑張れるような気がするんだ

そして強くなれるような気がしてるんだ

どこにいても なにをしてても

君の視線を感じているよ

震える肩

傷だらけの僕を

そっと抱きしめてくれる君

そのぬくもりが心を震わせる

おかしいね

抱きしめている君の方が

僕の心の痛みを感じて

泣いてくれてるから

僕は優しい気持ちになる

まるで自分のことのように

痛みを感じて

こぼれ落ちる君の涙を

僕は拭いながらキスをした

ありがとう

君が居てくれて良かった

口下手

想いは誰にも負けないくらいなのに
君を目の前にするとうまく喋れないんだ

想いがたくさん有り過ぎるから喉に
伝えたい言葉が詰まってしまうんだろうな

どうして僕はこんなダメな男なんだろう
どうして君はこんなダメな所も微笑むの？

なんども君に想いを伝えようとするけれど
口下手な僕はうまく喋れないから

この想いを手紙に書くように
言葉にして 文字にして 詩にして

愛しい君に読んでもらえるように
想いを込め 感情を込め 心を込めて

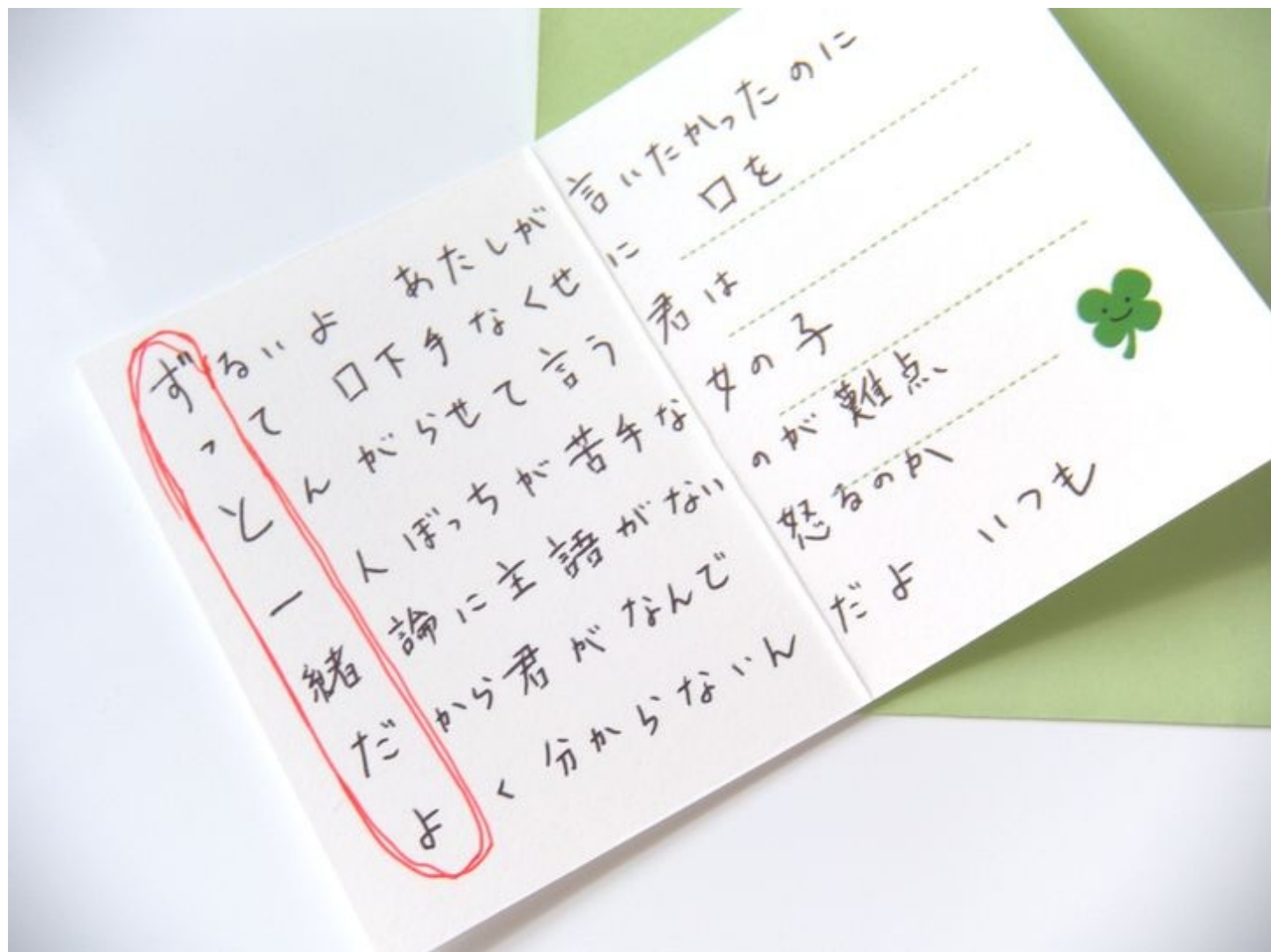
歌うんだ

月に囁くように

暗号メモ

ずるいよ あたしが言いたかったのに
って 口下手なくせに 口を
とんがらせて言う君は
一人ぼっちが苦手な女の子
緒論に主語がないのが難点
だから君がなんで怒るのか
よく分からないんだよ いつも

まあ そんなメモを君に渡したけれど
このメモに僕の気持ちを隠しておいたよ
とても恥ずかしくて口にできないから



手をつなごう

何年経っても
変わらない気持ちで
君のことを想っているよ

なんて約束
僕にはできないから

この先いろんな気持ちで
変わり続ける僕らだけど
いつでも君が僕の心に居るよ

約束なんてできないけどね...

変わり続ける僕らの気持ちが
離れ離れにならないように
心のなかで手をつなごう

ひとつになれる場所

君 と 僕

ふたりでいるときは楽しくて
時間があっという間に過ぎてゆくね

僕 と 君

離れているときは寂しくて
はやく明日にならないかってもどかしいね

寂しさを埋めるために ふたりは出逢ったんじゃなくて
楽しい時間を過ごすためだけに 一緒にいるわけじゃないんだよね

ふたりは想いが深まるたびに
互いが相手を慈しむようになり 尊重し合うようになった

君は僕だけのために尽くそうとして疲れたんだね
僕は君のためになると思って押し付けてたんだね
きっとふたりは相手のことしか見えなくなっていたんだよ

僕らは鏡のように向き合って ようやく気付いたんだ
そこにはふたりの姿が映っていることを...

相手だけを見て 自分のことを見ないのは
実は相手のことも見てないことなんだなあって

そしてふたりは真に向き合い気付いたんだ
自分自身に向き合い 相手とも向き合い
ふたりがひとつになれる場所を見つけたんだ

“それは互いの心のなか”

君と僕 僕と君 ひとつになれる場所

僕の詩を君に捧ぐ

<http://p.booklog.jp/book/32689>

著者 : macoto

著者ブログ『もの思い』 : <http://ameblo.jp/maco-monoomoi/>

著者プロフィール : <http://p.booklog.jp/users/macoto-monoomoi/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32689>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32689>

電子書籍プラットフォーム : ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社 : 株式会社paperboy&co.